

2016 年度事業報告 (2016 年 4 月 1 日～2017 年 3 月 31 日)

日本気象学会は2013年4月1日に公益社団法人に移行し、定款第3条のとおり「気象学、大気科学等の研究を盛んにし、その進歩をはかり、国内及び国外の関係学協会等と協力して、学術及び科学技術、並びに文化の振興及び発展に寄与すること」を目的として、2016年度も定款第4条で定める以下の事業を推進した。

- ・ 気象学、大気科学等に関する研究会及び講演会等の開催
- ・ 機関誌その他気象学、大気科学等に関する図書等の刊行
- ・ 研究の奨励、援助及び研究業績の表彰
- ・ その他この目的を達成するために必要な事業

I 気象学・大気科学等に関する研究会及び講演会等の開催事業の実施（公益目的事業 1）

気象学・大気科学に関する研究成果や最新の知見を、大会における講演発表、公開気象講演会、各支部における研究報告会並びに普及活動等を通じて社会に公表し、学術及び科学技術、並びに文化の振興及び発展を図った。

1. 研究会等の開催

(1) 全国大会

春季並びに秋季に開催している全国大会は、会員等が研究及び調査の成果を発表する研究集会であり、2016年度は、春季は東京を秋季は名古屋を開催地として、以下のとおり開催した。各大会は講演企画委員会と担当機関内に設置された実行委員会が協力して、企画運営を行っている。

① 2016 年度春季大会

期 日：2016 年 5 月 18～21 日

場 所：国立オリンピック記念青少年総合センター

担 当：気象庁

参加者：785 名

講演数：専門分科会 13 件、口頭発表 192 件、ポスター発表 111 件、合計 316 件

シンポジウム：「竜巻の観測・予測の現状と将来」（5 月 20 日）

② 2016 年度秋季大会

期 日：2016 年 10 月 26～28 日

場 所：名古屋大学東山キャンパス

担 当：名古屋地方気象台、名古屋大学、三重大学、信州大学、日本気象協会中部支社、
日本気象予報士会東海支部

参加者：787 名

講演数：口頭発表 187 件、ポスター発表 194 件、スペシャル・セッション 102 件、合計 483 件

シンポジウム：「航空機が気象学にもたらす科学イノベーション」（10 月 27 日）

(2) 調査研究会

2016年度、調査研究会は開催されなかった。

(3) 研究連絡会

研究連絡会は会員の自主的な発議に基づき、理事会の承認を得て設置されており、若干の世話人を中心に運営されている。2016年度に新たに「気象学史研究連絡会」の設立が理事会で承認された。現在合計 14 の研究連絡会が設置されており、以下の 12 研究連絡会が合計 14 回の研究会を、主に春季・秋季大会の期間中に開催した。

研究連絡会	期日	場所	テーマ
メソ気象 観測システム・予測可 能性	2016 年 5 月 17 日	東京	アンサンブル予報の発展と展望 (メソ気象研究連絡会、観測システム・予測可能性研究連 絡会、気象庁数値モデル研究会が合同で開催)
極域・寒冷域	2016 年 5 月 18 日	東京	極域における気象庁客観解析データの再現性と利用

オゾン	2016年5月20日	東京	静止衛星からの大気化学観測の新時代
惑星大気	2016年5月21日	東京	あかつきの現況と今後
台風	2016年8月4～5日	名古屋	台風セミナー2016
熱帯気象	2016年9月29日	宇治	第8回熱帯気象研究会
メソ気象	2016年10月25日	名古屋	疑似温暖化実験のメソ気象研究に対する可能性
極域・寒冷域	2016年10月26日	名古屋	南極域におけるエアロゾル研究の現状と今後
統合的陸域圏	2016年10月26日	名古屋	土壌からの温室効果ガス排出とそのメカニズム
観測システム・予測可能性	2016年11月8～10日	宇治	東アジア域における季節内変動
非静力学数値モデル	2016年11月30日～ 12月2日	箱根	The 4 th International Workshop on Nonhydrostatic Models (NHM2016)
長期予報	2016年12月9日	東京	成層圏-対流圏-雪氷の相互作用と予測可能性
航空気象	2017年2月7日	東京	調査・研究報告会
天気予報	2017年2月17日	東京	沿岸波浪、高潮防災

(4) 気象研究コンソーシアム

気象研究コンソーシアムは、日本気象学会と気象庁とで締結された包括的な共同研究契約「気象庁データを利用した気象に関する研究」に基づく枠組みである。2016年度におけるこの枠組みを利用した研究課題数は、継続課題43件、新規課題1件の合計44件である。

(5) 他学会との共催等

他学会と共催で、気象学・大気科学に関する研究会やシンポジウム等を実施し、研究成果の公開に努めると共に、関連分野の研究者との情報交換・情報共有に努めた。2016年度は以下の会合等を開催した。

① 第53回アイソトープ・放射線研究発表会

主催：日本アイソトープ協会（2016年7月6～8日：東京大学弥生講堂）
気象学会から委員を選出し運営に参画している。

② 第33回エアロゾル科学・技術研究討論会

主催：日本エアロゾル学会（2016年8月31日～9月2日：大阪府立大学）

③ 第2回防災学術連携シンポジウム「激甚化する台風・豪雨災害とその対策」

主催：日本学術会議 防災減災・災害復興に関する学術連携委員会
防災学術連携体（2016年12月1日：日本学術会議講堂）
気象学会から防災学術連携体に委員を選出し運営に参画している。

④ 第24回風工学シンポジウム

共催：日本建築学会、日本風工学会、土木学会、日本鋼構造協会（2016年12月5日～7日：建築会館）

⑤ シンポジウム「関東の大雪に備える」

主催：日本雪氷学会関東・中部・西日本支部、日本気象学会メソ気象研究連絡会
（2016年12月10日：気象庁講堂）

⑥ 第59回「風に関するシンポジウム」

主催：日本風工学会（2017年3月13日：日本大学理工学部駿河台校舎）

(6) 支部研究会活動

各支部において年1～4回、地域特有の現象等に関する気象学・大気科学の研究成果の発表会を行い、成果の公開に努めると共に、研究者間での情報交換・情報共有に努めた。2016年度は以下のとおり実施した。

- ① 北海道支部
 - ア 第1回研究発表会 2016年6月27日（札幌市）（参加者約20名）
 - イ 第2回研究発表会 2016年12月19～20日（札幌市）（参加者約60名）
- ② 東北支部 支部研究会 2016年12月5日（仙台市）（参加者約70名）
- ③ 中部支部 支部研究会は開催せず（秋季全国大会開催のため）
- ④ 関西支部
 - ア 支部年会 開催中止
 - イ 第1回支部例会 2016年11月19日（岡山市）（参加者約35名）
 - ウ 第2回支部例会 2016年12月9～10日（高知市）（参加者約40名）
 - エ 第3回支部例会 2016年12月20～21日（大阪市）（参加者約30名）
- ⑤ 九州支部 支部発表会 2017年3月5日（熊本市）（参加者約50名）

⑥ 沖縄支部 支部研究会 2017年3月2日(名護市)(参加者約35名)

(7) その他

日本気象学会夏期特別セミナー(若手会 夏の学校)開催への援助

本セミナーは、若手研究者の研究発表の実施並びに最先端の研究を行う気象研究者による講演を行うことにより、若手研究者相互の交流や研究意識を高めることを目的としており、日本気象学会が援助を行っている。2016年度は、以下のとおり行われた。

- ・日時：2016年8月5日～7日
- ・場所：大学セミナーハウス(東京都八王子市)
- ・内容等：招待講演(講師5名の方々による講演)、一般講演(学生、若手研究者による口頭・ポスター発表 計24件)
- ・参加者：約125名

2. 一般向け普及・啓発活動

(1) 公開気象講演会

公開気象講演会は、教育と普及委員会が中心となって、一般市民の方々に気象に関する最近の研究成果を分かりやすく解説することを目的として、春季大会開催時に開催している。2016年度は以下のとおり実施した。

- ・日時：2016年5月21日
- ・場所：国立オリンピック記念青少年総合センター
- ・テーマ：台風災害～台風列島でどう生き延びるのか?～

(2) 第50回夏季大学

夏季大学は、最新の気象学の知識の普及を目的に、小中高校の教職員や、気象の愛好家を対象とした、やや専門性の高い講座で、教育と普及委員会が中心となって毎年度開催している。2016年度は以下のとおり実施した。

また、同様の活動は以下の(5)で示すように、各支部においても実施している。

- ・日時：2016年7月30日(土)～31日(日)
- ・場所：気象庁講堂
- ・テーマ：エルニーニョ現象と異常気象

(3) 気象サイエンスカフェ

気象サイエンスカフェは、日本気象学会と日本気象予報士会が共催する「気象の専門家や有識者」と「その話を聴いたり話したりしてみたい方」との科学コミュニケーションの場として、2006年春に東京でスタートした。現在は各支部を中心に全国各地で開催している。2016年度の開催状況は以下のとおりである。また、同様の活動は(5)で示すように、各支部においても実施している。

- ①日時：2016年4月8日、場所：東京都(日本気象協会会議室)、テーマ：天気にも愛される技術～天の神様の気持ちに沿う生き方～
- ②日時：2016年7月28日、場所：つくば市(BiViつくば)、テーマ：“ゲリラ豪雨”との戦い～勝ち方教えます～
- ③日時：2016年10月1日、場所：東京都(東京理科大学理窓会第1会議室)、テーマ：言葉だけで伝える気象情報～ラジオでの気象解説の裏話～

(4) ジュニアセッションの開催

ジュニアセッションは、気象学に興味を持つ主に高校生・高専生(中学生も可)を対象に、生徒達が気象学会の大会会場において、専門家の前で発表体験をすることにより、生徒達の気象学に対する興味や探究心が高まり、学会としての社会貢献にとどまらず、将来の気象学の発展とより豊かな社会の招来に繋がることを期待して開催している。2016年度は、以下のとおり、第2回を実施した。

- ・日時：2016年5月21日
- ・場所：国立オリンピック記念青少年総合センター
- ・参加校数、発表件数：11校、16件

(5) 支部普及活動

各支部において、それぞれの地域の実情に応じて、「気象講演会」、「サイエンスカフェ」、「こども気象学会」、「こども気象学教室」、「離島お天気教室」等、一般市民並びに子供を対象に普及活動に努めている。2016年度は以下の活動を実施した。

支部	活動	日時	場所	内容	参加者
北海道	サイエンスカフェ	2016年9月18日	札幌市	風の正体とその姿～突風災害から身を守る～	約120名
	気象講演会	2016年11月25日	札幌市	第4回エアロゾルシンポジウム	約30名
	気象講演会	2017年3月16日	札幌市	北海道支部創立60周年式典における記念講演	約60名
東北	気象講演会	2016年11月19日	盛岡市	岩手県における大雨と風の災害	約100名
	サイエンスカフェ	2017年1月22日	仙台市	スーパーエルニーニョの次はラニーニャが心配！天気はどうなる！？	約50名
中部	サイエンスカフェ	2016年10月15日	名古屋市	都市の気候と緑・水の環境デザイン	約20名
	公開気象講座	2016年10月27日	名古屋市	秋季大会シンポジウム「航空機が気象学にもたらす科学イノベーション」として、一般の方も参加できる形で開催	約300名
	サイエンスカフェ	2016年12月3日	長野市	気象情報とネットワークメディアの活用 天文学で読み解く銀河鉄道の夜－気象と天文の交わる星景写真の紹介－ 4K映像による空の探検－動きでわかる気象現象のいろいろ－	約90名
	サイエンスカフェ	2017年2月11日	名古屋市	天気予報のいま・むかし・これからのお話	約40名
関西	夏季大学	2016年8月20日	京都市	豪雨災害の実態に迫る	約125名
	講演会	2016年11月19日	岡山市	グリーンランド氷床表面の暗色化に関する科研費の概要	約35名
	講演会	2016年12月9～10日	高知市	2016年台風第5～7、9～11号の発生に関わるモンスーン渦の特徴と成因	約40名
	サイエンスカフェ	2017年1月28日	大阪市	天候と健康 ～健康管理に使える気象のお話～	約25名
九州	気象教室	2016年8月27日	北九州市	竜巻研究の歴史と最前線	約70名
	サイエンスカフェ	2017年1月28日	鹿児島市	あったか～い！かごしま茶と天気のコツ	約35名
	サイエンスカフェ	2017年1月28日	福岡市	PM2.5 もう一つの顔－大気汚染と気候変動－	約40名
	ジュニアセッション	2017年3月5日 支部発表会のセッションとして実施	熊本市	参加校数：3、発表件数：3	生徒14名他6名
沖縄	子ども気象学教室	2016年8月3～5日	那覇市	小学生高学年に気象や地震・津波、自然災害について講義や実験を行う	約30名
	親と子のお天気教室	2016年8月10日	那覇市	後援	約270名
	離島お天気教室	2016年10月14日	与那国町	石垣島地方気象台と共催	約35名
	離島お天気教室	2016年10月21日	北大東村	南大東島地方気象台と共催	約75名
	離島お天気教室	2016年11月11日	竹富町	石垣島地方気象台と共催	約50名
	防災気象講演会	2016年10月13日	与那国島	石垣島地方気象台と共催	約30名
	防災気象講演会	2016年11月10日	西表島	石垣島地方気象台と共催	約30名
	防災気象講演会	2017年1月25日	那覇市	沖縄気象台、沖縄県等と共催	約160名
	サイエンスカフェ	2017年1月21日	那覇市	台風研究の最前線～台風とうまい“お付き合いのコツ”伝授します～	約50名
施設見学	2017年3月2日	名護市	国際海洋環境情報センター	約35名	

(6) その他

① 気象教育懇談会

最新の気象学の一般社会への普及活動の一環として、気象に関する教育支援を目的とした「気象教育懇談会」を開催している。初中等教育関係者のみならず、研究者・気象業務担当者・高等教育関係者の情報交換の場として機能している。2016年度は「天気図の書き方・読み方 / 気象を教える上での悩み相談会」として、特に、中学校などで気象が専門ではないが教える立場に立つ先生方の役に立つよう、天気図の描き方や読み方についてのサポートを行い、教材の工夫などを話題とした（2017年1月8日：日本気象協会会議

室)。

② 気象予報士 CPD 制度の支援

2015 年度に引き続き、気象予報士の気象技能の継続的な研鑽を目的とした CPD (Continuing Professional Development) 制度を支援し、CPD 制度運営委員会 (2017 年 2 月 4 日の 1 回開催) に出席した。委員会では「気象予報士 CPD 認定者」の認定条件の確認を行い、また本制度に関するロゴを決定した。引き続き、適切な CPD ポイントを設定するための CPD 認定委員会に、気象学会から 3 名の委員が選任されている。なお、CPD 認定は 2017 年度から開始される予定である。

③ 教育活動の拡充 (関西支部)

- ・ 夏季大学に合わせて、大学で気象学を学びたい高校生や気象の知識を活かした就職を希望する方を対象にした「気象関係合同進路説明会」を実施 (参加総数は 11 名)。
- ・ 夏季大学に高校生の参加費を無料にする促進策を実施 (4 名の応募があり、内 2 名が参加)。

II 機関誌その他気象学・大気科学等に関する図書等の刊行事業の実施 (公益目的事業 2)

気象学・大気科学に関する研究成果や最新の知見を、刊行物によって社会に公表することを通じて、学術及び科学技術の振興と発展を図っている。2016 年度は、以下の 1～5 の 5 種類の図書の刊行を行った。

1. 機関誌「天気」の刊行

「天気」は、和文の査読つき論文、気象学・大気科学に関する解説、学術集会の報告、その他日本気象学会や関連学会等の情報などを掲載した月刊の機関誌である。編集作業等は、全国の会員 40 名余りで構成された天気編集委員会が担当している。

2016 年度は「第 63 巻 4 号～第 64 巻 3 号 計 984 ページ」を刊行した。また、冊子体の発行からおよそ 1 ヶ月後に、電子ジャーナル版を公開している。

2. 英文論文誌「気象集誌」の刊行

「気象集誌 (Journal of the Meteorological Society of Japan)」は、英文の査読つきオリジナル論文及びレビュー論文のみを掲載する隔月刊の論文誌である。編集作業等は、海外の研究者を含む 25 名余りで構成された気象集誌編集委員会が担当している。

2016 年度は「第 94 巻 2 号～第 95 巻 1 号 計 511 ページ、論文 26 編」を刊行した。また、2016 年の投稿論文から冊子体刊行に先じて電子ジャーナル版を公開した。

一方、日本学術振興会から (科学研究費補助金 : 研究成果公開促進費) を受け、2013 年度から 5 ヶ年計画で「国際情報発信強化の取組」を進めている。取組の目的は気象集誌の国際的な評価を高め、国内外の投稿論文数の増加、質の向上を図り、インパクトファクターを向上させることにある。2016 年度は以下の項目を実施した。

- ・ 同一著者による 1 年以内の投稿論文に対して投稿料の減免措置を行った。
- ・ 昨年度未掲載のアジアオセアニア地球科学学会で発表した論文の気象集誌特集号への掲載促進のため投稿料の補助を行った。
- ・ J-STAGE 掲載論文の引用促進のため、気象集誌ホームページの更新を行い、広報の強化を図った。
- ・ Web of Science やアクセスカウンター等の情報を活用し、Facebook 等により気象集誌論文の認知度向上を図った。

3. 英文レター誌「SOLA」の刊行

「SOLA」は、速報性を重視した Web 上 (電子版) のみで公開する英文の査読つきレター誌である。速報性を重視しているため、1 編の英単語数の上限を 3100 語 (約 4 ページ相当) としている。編集作業等は、海外の研究者を含む 40 名余りで構成された SOLA 編集委員会が担当している。

2016 年度は「第 12 巻、第 12 巻 A、第 13 巻 計 308 ページ 論文 55 編」を刊行した。

4. 「気象研究ノート」の刊行

「気象研究ノート」は気象学・大気科学の最新の知見や技術について、テーマごとに詳細に解説を掲載した不定期刊行の学術誌である。編集作業等は、委員 12 名で構成された気象研究ノート編集委員会が担当している。

2016 年度は、232 号「気象学における非弾性力学入門」を刊行した。

5. 「大会講演予稿集」の刊行

「大会講演予稿集」は、春季・秋季大会の発表論文の予稿（要約を1ページに掲載）を全て掲載した刊行物である。掲載講演数は大会ごとに400～500件になる。編集作業等は、大会の講演全般を管理する講演企画委員会が担当している。

2016年度は「109号（春季大会）：専門分科会13件、口頭発表192件、ポスター発表111件、合計316件」、「110号（秋季大会）：スペシャル・セッション102件、口頭発表187件、ポスター発表194件、合計483件」を刊行した。なお、110号では、CD-ROMを予稿集に添付した。

III 研究の奨励、援助および研究業績の表彰事業の実施（公益目的事業3）

学術及び科学技術の振興及び発展を図ることを目的に、気象学・大気科学に関する個人またはグループの優秀な研究・教育・普及活動等の業績を顕彰している。

また、若手研究者を対象に、国外での学術研究集会への参加に際しての旅費等の援助を行うとともに、我が国で開催する学術研究集会への国外からの参加を促すために、旅費等の支援を実施している。これらの活動を行うことにより、国際学術交流を推進している。

1. 研究業績の表彰

(1) 日本気象学会の表彰

2014年度からは、新たに岸保賞を設けると共に、従来の山本・正野論文賞の主旨を継承発展させた正野賞と山本賞の2つの賞を新たに設けた。これにより、日本気象学会賞、藤原賞、岸保賞、堀内賞、正野賞、山本賞、奨励賞の7つの賞となり、気象学・大気科学の多様な分野と多様な世代の優れた研究者を幅広く顕彰することが可能となり、奨励事業の拡充を図ることができた。

それぞれの賞に対する候補者推薦委員会より推薦された候補者について、理事全員の投票により受賞者を決定している。

この他、気象集誌論文賞並びにSOLA論文賞は、それぞれの編集委員会が決定している。2016年度は以下の通り顕彰を実施した。

賞	受賞者	業績又は対象論文
日本気象学会賞	竹川暢之（首都大学東京）	先端計測に基づくエアロゾル生成過程に関する研究
	三好建正（理化学研究所）	アンサンブルカルマンフィルタによるデータ同化の高度化に関する研究
藤原賞	杉 正人（気象研究所）	数値天気予報・長期予報の精度向上並びに気候・地球温暖化予測研究への諸貢献と推進
	津田敏隆（京都大学）	電波リモートセンシング技術による大気擾乱の観測的研究
岸保賞	眞木雅之（鹿児島大学）、上田博（名古屋大学）、中北英一（京都大学）	Xバンド偏波レーダーによる降水観測技術の開発及び社会実装
堀内賞	米山邦夫（海洋研究開発機構）	船舶観測によるマッデン・ジュリアン振動研究と国際プロジェクトの推進
	Prabir K. Patra（海洋研究開発機構）	モデル解析を基にした温室効果気体の全球規模循環に関する研究
正野賞	宮崎雄三（北海道大学）	生物起源の大気有機エアロゾルに関する観測的研究
	松枝未遠（筑波大学）	現業アンサンブル予報データを利用した予測可能性研究と予測プロダクトの作成
山本賞	齋藤 泉（名古屋工業大学）	回転球面上の二次元乱流における赤道西風ジェット形成メカニズムに関する研究
	高麗正史（東京大学）	極域対流圏界面雲の出現に関する力学的研究
奨励賞	鵜山義晃（三重県立桑名高等学校）	空・雲の観察を題材にした気象学の普及
	瀧本家康（神戸大学附属中等教育学校）	大学ならびに地域と連携した気象防災教育の実践

気象集誌 論文賞	Schubert, W. H., C. J. Slocum, R. K. Taft (Colorado State University)	Schubert, W. H., C. J. Slocum, and R. K. Taft, 2016: Forced, balanced model of tropical cyclone intensification. <i>J. Meteor. Soc. Japan</i> , 94, 119-135, doi.org/10.2151/jmsj.2016-007
	別所康太郎, 伊達謙二, 林 昌宏, 池田秋央, 今井崇人, 井上英和, 熊谷幸浩, 宮川卓也, 村田英彦, 大野智生, 奥山 新, 小山 亮, 佐々木 幸男, 島津 好男, 下地 和希, 隅田康彦, 鈴木万寿男, 谷口秀隆, 土山博昭, 上澤大作, 横田寛伸, 吉田 良 (気象庁)	Bessho, K., K. Date, M. Hayashi, A. Ikeda, T. Imai, H. Inoue, Y. Kumagai, T. Miyakawa, H. Murata, T. Ohno, A. Okuyama, R. Oyama, Y. Sasaki, Y. Shimazu, K. Shimoji, Y. Sumida, M. Suzuki, H. Taniguchi, H. Tsuchiyama, D. Uesawa, H. Yokota, and R. Yoshida, 2016: An introduction to Himawari-8/9 - Japan's new-generation geostationary meteorological satellites. <i>J. Meteor. Soc. Japan</i> , 94, 151-183, doi.org/10.2151/jmsj.2016-009
	北村祐二 (気象研究所)	Kitamura, Y., 2016: Improving a turbulence scheme for the terra incognita in a dry convective boundary layer. <i>J. Meteor. Soc. Japan</i> , 94, 491-506, doi.org/10.2151/jmsj.2016-028
SOLA 論文賞	足立 透, 楠 研一, 吉田 智, 猪上華子, 新井健一郎 (気象研究 所), 牛尾知雄 (大阪大学)	Adachi, T., K. Kusunoki, S. Yoshida, H. Inoue, K. Arai, and T. Ushio, 2016: Rapid Volumetric Growth of Misocyclone and Vault-Like Structure in Horizontal Shear Observed by Phased Array Weather Radar. <i>SOLA</i> , 12, 314-319, doi:10.2151/sola.2016-061

(2) 九州支部奨励賞

九州支部の独自活動の一つとして、支部会員で、「気象学の向上に資する研究を行っている」、「気象学の教育・啓蒙活動を積極的に行っている」、「気象学を応用した活動で社会に貢献している」のいずれかの項目に該当する者を最大で3名選び顕彰している。

2016年度は以下のとおり、1名を顕彰した。

受賞者：道端拓朗

所属：九州大学大学院総合理工学府大気海洋環境システム学専攻 博士課程 2年

(3) 部外表彰等受賞候補者の推薦

関係団体等が主宰するいくつかの賞に対して、日本気象学会として候補者を推薦している。部外表彰等候補者推薦委員会が担当している。2016年度は、朝日賞・日本学術振興会育志賞・文部科学大臣表彰科学技賞・井上賞・東レ科学技術賞・東レ科学技術研究助成の候補者を推薦した。

2. 国際学術交流事業への支援・援助

国際学術研究会等に出席して論文の発表もしくは議事の進行に携わる予定の者に、申請によって渡航費の補助を行っている。資格は学会員に限定しないが、原則として修士論文提出程度の研究実績を要する者で、他から渡航費の援助を得られない者に限定している。

国際学術交流委員会が担当しており、2016年度は以下のとおり補助を行った。

- ・申請者：辻 宏樹 (九州大学大学院理学府)
- ・会議名：32nd Conference on Hurricanes and Tropical Meteorology
- ・場 所：アメリカ合衆国プエルトリコ自治連邦区サンファン
- ・期 間：2016年4月17日～22日

IV その他この目的を達成するために必要な事業の実施

1. 会員の異動状況

2016年度の会員の異動状況は下表のとおりである。近年の会員数の減少は1～2%/年であったが、2016年度はわずかの減少で、個人会員は0.1%、団体会員は1%の減少であった。また、個人会員の中では、一般のA、Bの両会員の減少が目立つ一方、一般のC会員、学生会員(B、C)及び高年会員(A)では増加している。高年会員の増加は、一般会員から高年会員への変更によるものと考えられる。

社員種別		社員数		増減数
		本年度末 (2017年3月31日)	前年度末 (2016年3月31日)	
個人会員	A	2,333	2,359	△26
	B	381	412	△31
	C	45	31	14
	A (学生)	185	187	△2
	B (学生)	20	16	4
	C (学生)	32	14	18
	A (高年)	227	206	21
	B (高年)	12	12	0
	C (高年)	2	2	0
	合計	3,237	3,239	△2
団体会員	団体A	74	72	2
	団体B	73	75	△2
	団体C	52	54	△2
	合計	199	201	△2
賛助会員		27	27	0
名誉会員		18	18	0
計		3,481	3,485	△4

2. 役員の選任及び解任

2016年度総会で第39期理事20名、監事2名を次の通り選任した。任期は、理事が2016年度総会の日から2018年度総会の日までの2年間、監事が2020年度総会の日までの4年間である。

なお、理事及びそれぞれの主担当は以下のとおりである。

氏名	所属	主担当
岩崎 俊樹	東北大学大学院理学研究科教授	理事長 (代表理事)
瀬上 哲秀	元気象研究所長	副理事長, 企画調整, 気象災害
石原 幸司	気象庁地球環境・海洋部気候情報課 調査官	会計担当
榎本 剛	京都大学防災研究所准教授	電子情報
近藤 豊	国立極地研究所特任教授	学会賞候補者推薦, 名誉会員推薦
佐藤 薫	東京大学大学院理学系研究科教授	人材育成・男女共同参画
佐藤 正樹	東京大学大気海洋研究所教授	気象集誌編集, 正野賞候補者推薦
塩谷 雅人	京大大学生存圏研究所教授	堀内賞候補者推薦, 学術
高菽 出	気象研究所環境・応用気象研究部長	奨励賞候補者推薦
竹見 哲也	京都大学防災研究所准教授	SOLA編集
坪木 和久	名古屋大学宇宙地球環境研究所教授	気象研究コンソーシアム
仲江川 敏之	気象研究所気候研究部室長	講演企画
中村 尚	東京大学先端科学技術研究センター 副所長・教授	気象研究ノート編集, 部外表彰等候補者推薦
平松 信昭	一般財団法人日本気象協会 (防災ソリューション事業部) 担当部長	教育と普及
廣岡 俊彦	九州大学大学院理学研究院教授	岸保・立平賞候補者推薦, 地球環境問題
藤部 文昭	首都大学東京都市環境学部特任教授	天気編集
堀之内 武	北海道大学地球環境科学研究院准教授	山本賞候補者推薦
山田 和孝	気象庁予報部数値予報課予報官	庶務担当
余田 成男	京都大学大学院理学研究科教授	藤原賞候補者推薦
渡部 雅浩	東京大学大気海洋研究所教授	国際学術交流

また、監事は、以下のとおりである。

氏名	所属
鈴木 靖	一般財団法人日本気象協会技師長
高谷 康太郎	京都産業大学理学部准教授

3. 声明・提言・要請・要望の発出

気象学会の活動に密接不可分な活動等に関連する事案及び依頼機関等のこれまでの活動等並びに今後の活動等において気象学・大気科学との密接な関連性が認められる事案に対して、気象学会の目的を遂行するために声明・提言・要請・要望を公表することとしている。

2016年度はこれらの発表はなかった。

4. 会議等の開催

(1) 社員総会

全ての個人会員で構成される社員総会は学会の最高意思決定機関であり、年1回春季大会の期間に開催している。2016年度は、2016年5月19日に国立オリンピック記念青少年総合センター大ホールで開催した。

総会においては以下の議案を審議し、総会参加票による参加者を加えて賛成多数で承認した。

- ① 審議事項 議案 1. 「2015年度事業報告」
- 議案 2. 「2015年度決算報告」
- 議案 3. 「2015年度監査報告」
- 議案 4. 「第39期役員を選任について」
- ② 報告事項 報告 1. 「2016年度事業計画」
- 報告 2. 「2016年度収支予算」

(2) 理事会

8月を除く毎月1回、理事長が招集し開催している。理事20名、監事2名によって理事会を構成しているが、理事長は必要に応じて支部長等の出席を求めて開催することが出来る。2016年度の理事会議題（協議事項）は以下の表のとおりである（定常的な報告事項は省略）。

なお、理事会開催場所に出席できない理事もWeb会議システムを通じて出席できることが可能であることから、毎回数名の理事がこの方法で出席している。

開催年月日	協議事項	協議の結果
第38期第21回理事会 (2016年4月14日)	1. 第38期第20回理事会議事録の確認	全会一致で承認
	2. 会員の新規加入等について	〃
	3. 2016年度総会議案について(2015年度事業報告、決算報告等)	〃
第38期第22回理事会 (2016年5月18日)	1. 第38期第21回理事会議事録の確認	全会一致で承認
	2. 会員の新規加入等について	〃
	3. 2015年度総会資料について	〃
第39期第1回理事会 (2016年5月20日)	1. 第39期理事長の選定(岩崎俊樹)	無記名投票で決定
	2. 第39期副理事長の選定(瀬上哲秀)	全会一致で承認
	3. 業務執行理事の選定(瀬上哲秀、山田和孝、石原幸司)	〃
	4. 委員長、副委員長の選定	〃
第39期第2回理事会 (2016年6月27日)	1. 第38期第22回理事会議事録の確認	全会一致で承認
	2. 第39期第1回理事会議事録の確認	〃
	3. 2016年度総会議事録の確認	〃
	4. 会員の新規加入等について	〃

第39期第3回理事会 (2016年7月22日)	1. 第39期第2回理事会議事録の確認	全会一致で承認
	2. 会員の新規加入等について	〃
	3. 専門分科会およびスペシャル・セッション運営改革	〃
	4. 岸保・立平賞の創設に伴う細則・規程の改廃について	〃
第39期第4回理事会 (2016年9月9日)	1. 第39期第3回理事会議事録の確認	全会一致で承認
	2. 会員の新規加入等について	〃
	3. 名誉会員からのご寄付について	検討を行った
第39期第5回理事会 (2016年10月26日)	1. 第39期第4回理事会議事録の確認	全会一致で承認
	2. 会員の新規加入等について	〃
第39期第6回理事会 (2016年11月21日)	1. 第39期第5回理事会議事録の確認	全会一致で承認
	2. 会員の新規加入等について	〃
	3. 第39期評議員候補者について	検討を行った
第39期第7回理事会 (2016年12月26日)	1. 第39期第6回理事会議事録の確認	全会一致で承認
	2. 会員の新規加入等について	〃
	3. 掲載料免除規程の改正について	〃
	4. 堀内賞受賞者選定規程の改正について	〃
	5. 気象学史研究連絡会の設立について	〃
第39期第8回理事会 (2017年1月30日)	1. 第39期第7回理事会議事録の確認	全会一致で承認
	2. 会員の新規加入等について	〃
第39期第9回理事会 (2017年2月21日)	1. 第39期第8回理事会議事録の確認	全会一致で承認
	2. 会員の新規加入等について	〃
	3. 2015年度決算（正味財産増減計算書）の修正について	〃
	4. 2017年度事業計画案、収支予算案について	〃
第39期第10回理事会 (2017年3月23日)	1. 第39期第9回理事会議事録の確認	〃
	2. 会員の新規加入等について	〃

(3) 支部長会議

公益社団法人移行に伴い、支部からの理事の選任が廃止されたことから、各支部との連携強化を図るため新たに支部長会議を設置した。新たに設置した支部長会議は、理事長・理事・監事・支部長により構成され、原則として年2回、理事長が招集して開催することとしている。

①第1回支部長会議

日時：2016年11月21日

議題：2016年度（上半期）支部活動報告（支部長報告）

2016年度（下半期）支部活動計画（支部長報告）

大会の運営について

学会運営の中期課題について

第39期の評議員会への対応

②第2回支部長会議

2017年4月21日開催を計画している。

(4) 評議員会

評議員会は、評議員・理事長・理事・監事・支部長によって構成し、理事会の諮問事項を審議する。評議員は諮問事項に適任な有識者に理事長が委嘱する。任期は2年である。

気象学会では、他の理数系学会と同様、学会員数が長期減少傾向にあり、大学院博士課程進学者も減少傾向にある。さらに社会的には、初等中等教育におけるいわゆる「理科離れ」が懸念されている。今後の学会の発展を図るためには、これまでの評議員会で検討された課題のうち、特に初等中等教育を含む人材育成に関する活動の強化が急務となっている。このような状況に鑑み、第38期評議員会に対して「(公社)日本気象学会における理科教育への取り組み」を諮問し、2016年度は第38期第2回評議員会を4月18日に実施した。

地球温暖化の進展に伴い、異常気象や局地的大雨などの極端現象の増加が懸念されている。こうした課題へ

の対処として、地球環境の監視、大雨の監視等に不可欠な地球観測システムの強化およびその利用技術の高度化が重要な課題となっている。このような状況に鑑み、第39期では、「地球観測の強化に向けて日本気象学会は何をなすべきか」を諮問することとした。

なお、評議員には、大学、研究機関、気象庁における各分野の有識者に就任を要請し、広範なご意見と議論を基に、学会の将来構想に資することとした。

第39期第1回の評議員会は2017年4月21日開催を計画している。

(5) 各種委員会

日本気象学会では23の委員会を設置して、公益目的事業1～3を分担して実施している。なお、上述した3つの事業報告の中で言及しなかった事業については、設置している各委員会活動の一環として実施している。

以下に2016年度に、各委員会で実施した事業についてその概要を記載する。

- ・ 電子情報委員会

学会サーバやメーリングリストの管理及びウェブサイト掲載情報の更新・機能充実に加えて、ウェブサイトのログイン機能実装、多国語化に向けた準備を進めた。

以上